

## 1982 年度学会賞受賞作品・授賞理由

---

### ◆石川賞「あづましい未来の津軽」

戸沼 幸市(早稲田大学都市計画研究室 代表)

〈選考理由〉

本書の特徴は津軽藩政時代から存続している津軽三十三ヶ所観音霊場巡りの道筋をたどりながら、由緒ある三十三ヶ所に立ち止まって、その地と近郷の市町村の風土と生活様式を見つめ、過去、現在を識り、未来を描く構成をとっている。今一步、具体的に紹介すると、

第1番から第33番迄、それぞれの地について歴史と未来をつなぐ地域開発のテーマを設定する。

例えば第5番、十腰内、これからの岩木山麓の姿、第12番、蓮川、五所川原・雪国のまちづくり。第15番、薄市、有畜複合農業、第30番、大光寺、弘前黒石連環都市圏、第33番、茂森、弘前・人間のための都市づくり・・・などである。これらのテーマを展開する間に青函、津軽半島、都市圏、都市、市街地、農山漁村集落と人々の生活圏の様々な拡がりに対応する地域社会のとらえ方を示し、地形と土地利用を河川流域、岩木山麓一帯、海岸段丘について将来像を描き出す。将来像を描き出す背景、基盤には地域振興の歴史、産業振興の伝統に対する配慮が払われている。

各地に深い愛情を注ぎながら、個性的なテーマを追究する一方、津軽地域の為に有効な計画概念と計画技術論の開発を試みている。例えば中間都市(6)・(14)、克雪のための地域区分と骨核づくり(12)、克雪のための道路断面(12)、有畜複合農業(15)、などが秀れた計画概念としてあげられよう、本書の最大の特徴は、多数の巧みなイラストにある。

イラストは実に多彩なものであるが、土地利用の姿を海岸段丘や山麓、河川流域の地形断面に切って説明し、提案しているのが津軽半島の地形と土地利用に適合して

おり、読者の理解を助けている。弘前黒石連環都市圏(30)、市街地の骨格(33)などは都市計画の目標概念の表現法として専門家にとっても示差に富んでいるし、これからの岩木山麓の姿(5)、亀力岡・館岡のむらづくり(7)、岩木川の総合利用構想(27)などは鳥瞰図手法に駆使して、平面図による計画図の限界をこえた総合的な地域計画を表現している。

戸沼幸市教授をはじめとするメンバーの10年にわたる津軽地方における活動の成果は56年6月に青森県が策定した津軽開発基本構想に、かなりの部分が流入し、既に岩木山麓地域は同グループの提案に怨って開発整備が着手されようとしている。

以上のように本書は都市計画の活動の新しいあり方を創り出し、その表現に独自の方式を開発した。その結果、地域の青年が自ら地域を学ぶ手引書としても県、市町村が地域を計画する上にも、既に有益な効果を現している。したがって石川賞に該当するものと判断した。

※()内は本書の巡回番号

### ◆論文賞「市街地形成とその規制手法に関する一連の研究」

石田 頼房(東京都立大学工学部 助教授)

〈選考理由〉

氏は上記について長年にわたって研究を進めてこられ、その成果は、都市計画制度の進展に多くの貢献をされてきた。とくに1979年から1982年にかけて、長年にわたって発表された”建築線制度に関する研究(No.1~4)”は、これまでの氏の研究の集大成ともいべきもので、市街地形成の基本となる建築線制度を主題にし、過去一世紀にわたって我国市街地形成の過程の中で建築線制度採用に到る経過、背景とその制度化運用について原文資料にさかのぼっての詳細な検討と多くの実証的研究を併せて、研究されたものである。我国の建築線制度は江戸時代以来の歴史的背景をもち、1919年市街地建築線法、1950年建築基準法、1981年地名計画制度の導入と推移し、今日に到っているが、その間欧米建築制度とくに1875年プロシア街路線及び建築線法にはじまるドイツ都市計画制度の導入とその理解が、我国建築線制度の制度化、進展に大きく関与している。本研究では、その第1回導入の1919年市街地建

築物法制定時における制度化の経緯、今日までの運用経過を具体的、実証的に検討し、さらに、第2回導入の1980年地区計画制度における1962年連邦建築法の地区詳細計画の紹介導入による制度化とその定着化について検討を加えており、今後の市街地形成の制度化進展に寄与するところすこぶる大きい。なお氏の研究は多くの後進研究者に継承され、今後この分野での研究発展に大きく貢献している。

以上、氏の研究は今後の都市計画の発展に寄与する処、大である。

### ◆論文賞「計画プロセスに関する一連の研究」

熊田 禎宣(東京工業大学工学部 教授)

〈選考理由〉

熊田氏の長年に亘る計画の科学化のための、分析、モデル提案など一連の業績は都市計画をシステム的に取扱うとともに、主体の要素を加味して考えていく点に独創的な考え方を見ることができる。また、情報システムのレベルアップを目指して、地域社会を対象に、自治体と、地域社会の人々の協力と同意を得ながら、その計画に対する有効な情報の提供のシステムと情報の場の構成についての計画策定実験を行ってきたものといえる。この意味で思考実験を通して、地学協同による社会的合意形成のシステム作りの為の一つの試みといえることができる。

都市計画におけるソフト面の開発という点で評価できる。

### ◆設計賞「浜松駅北口駅前広場」

栗原 勝(静岡県浜松市 代表 市長)

中沢 一夫(静岡県浜松市 代表 助役)

〈選考理由〉

本事業は東海道鉄道高架化事業、浜松駅周辺土地地区画整理事業等の一連の広域根幹事業成果の「しめくり」的な役割をもつものである。これら一連の事業内容は地方中核都市の抜本的な都市改造にも寄与し、21世紀につながる都市基盤を形成するものである。本広場はこの結果生れた豊かな空間に思い切った設計内容を展開・実現しえたものである。即ち、本来、広場の希求する歩行者と自動車の流れの完全

分離システム, 交通弱者を含む人間の取扱いに対する配慮, 公共交通であるバス利用に対する集約・利便性の確保, 都市美形成へのシンボリックな環境の創成, そして周辺都市形成への対応性等の対象設計内容を有するこれらはこれからの都市改造, 駅前広場のモデルとして位置づけられ, 評価されうるものとする。

#### ◆論文奨励賞「満州の都市計画に関する歴史的研究」

越沢 明(神奈川県都市部都市政策課)

〈選考理由〉

先世紀後半から今日に至る中国・東北地方の開発に伴って建設された都市の多くは, 日露戦争後から敗戦に至る約 40 年間に, 日本の植民活動によってつくられたものである。その計画と事業は断片的に伝えられてはいたが, 資料が散逸し, また旧植民地問題についての言及をはばかる気持もあって, 全体像は明らかにされてこなかった。しかし計画それ自体は極めて大きな価値を有している。

著者は精力的な文献収集と当時の関係者からの聞き取り調査により, これら都市計画の経緯と実態を明らかにした。19 世紀末のロシアによるハルピン等の計画から満鉄による諸計画, そして満州国時代の都市計画に至る背景と実情, 特に新京等の計画にみられる先進性が実証的に示されている。結論として「満州」の都市計画の意味が論じられている。

このように本論文は, わが国の近代都市計画を辿るうえで不可欠の部分を解明した。今後さらに, 当時の内地の計画状況との関連、戦後の復興都市計画との関係等発展されるべきテーマは多いが, その礎となる貴重な成果をあげた研究であって, わが国の都市計画史研究を一步前進させたと評価される。以上からして本研究は, 論文奨励賞にふさわしいものとする。

#### ◆論文奨励賞「土木計画のための意識構造分析」

石田 東生(筑波大学社会工学系 講師)

〈選考理由〉

都市計画が主として対象としてきた物的あるいは社会経済的領域に加え, 近年, 計

画策定にあたり関係主体が状況をどのように認識し、好みや価値を見出すかといった心理的領域に踏込む必要性は高くなりつつある。

得られた成果は、都市計画において、計画の関係主体である個人および集団の意識をどのように把握し、計画にとり込み、位置づけていくかという問題に対し、部分的ではあるが、一つの新しい方法論としての萌芽になり得ると考えられる。本研究が、これらの命題に向い、さらに発展することを期待し、論文奨励賞にふさわしいものであると考える。